

サンタはなぜ煙突からやって来るのか

この1年の様々な出来事や思いが凝集され、凝縮されて幾滴ものエッセンスとなって香り立ち、それがジングルベルとイルミネーションに彩られた街の賑やかさと混じり合って、年の瀬特有の空気を作り出している。

北国の12月は雪に閉ざされた重苦しい空間だが、同時にほんの7, 8年前まではきっとみんなもその存在を信じていたはずの、サンタクロースが橇に乗って煙突からプレゼントを届けてくれるほんのりとしたぬくもりのある季節でもある。

サンタが本当にいるのか新聞社に質問の手紙を書いた少女に、ニューヨークのサン新聞は社説で、「サンタクロースがいるというのは、けっしてうそではありません。この世の中に、愛や、人へのおもいやりや、まごころがあるのとおなじように、サンタクロースもたしかにいます。」と書いた。

みんなも含めて、私たち大人はいつからサンタクロースはいないと思い始めたのだろう。誰も見たことがないからか、サンタが橇で空を飛ぶなんて非科学的だからだろうか。

サン新聞は続ける。「サンタクロースがいなければ、人生のくるしみをやわらげてくれる、子どもらしい信頼も、詩も、ロマンスも、なくなってしまうでしょうし、わたしたち人間のあじわうよろこびは、ただ目にみえるもの、手でさわるもの、かんじるものだけになってしまうでしょう。また、子どもじだいに世界にみちあふれている光も、きえてしまうことでしょう。」



我々の身の回りには、科学で説明のつかないことは山のようにあり、それは日常茶飯に起きていることだ。愛や勇気や決意や希望といった深く強く、清らかな気持ちはどうだ。それらは目には見えないが、確かに存在し、私たちを支え、前に進ませる力だ。願いや祈りやシンクロニシティはどうか。想いは空間を満たし、時空を越えて浸透する。

サン新聞に手紙を送った少女がもう少し大きくなったら、私はこんな風にかきたいと思う。サンタクロースが彼方からやってくる橇の軌跡は、あなたがこれまで努力し続けてきた軌跡と同じだけ遠く、サンタの袋の中に入っているプレゼントは、あなたが願い、そのために苦勞してきたことが報われたご褒美なのだよ。そして、サンタがなぜ煙突からやって来るのか考えてごらん。空を飛べるほどのサンタだったら寝室の窓を開けたり、玄関を開けるのは難しいことではないけれど、わざわざあの狭い煙突から入るのには、プレゼントを手に入れるためには通らなければならない困難があることをきっとわかってほしいという寓意がこめられているんだね、と。

クリスマスイブに、大きなプレゼントの袋をもったサンタがきっとみんなの家を訪れる。特に、3年生の家には間違いなく。